

たちの子孫たちに教えて欲しい」

江戸時代末期、双葉町のある相馬藩の人口は、天明の大飢饉により激減、越中、加賀に移民を募集。淨土真宗の寺をつたい、多くの人たちが移民した。移民当初は、田の水はやらない、嫁はやらないなどの差別を受けたが、100年以上にわたって土地を耕し、地元に貢献して受け入れられた歴史がある。しかし再び、原発事故で故郷を追われた。

私が沖縄に移住した時、ウチナンチュ（沖縄人）になろうとしたが「腐ったナイチャヤー（日本人）は帰れ」と、厳しかった。30年以上沖縄に住み、ナイチャヤーのままで必要とされる役割を見つけ、住み続けている。

映画『盆唄』の撮影は3年間に及んだ。横山さんは「双葉を故郷と思うのは大人のエゴ。子どもたちにとっては避難先が故郷」と語った。この言葉を聞いて、私は映画を完成させた。双葉に置いたままの大人の魂。避難先での子どもの未来。故郷はあるものではなく、作るものなのか。その問いと責任は、すべての日本人にある。

## 子供たちが大志を抱ける地球環境へ

北海道札幌発

森本 淳子（洛北40期）

北海道大学農学部に勤め早12年になります。札幌が京都の次に長く暮らす地となりました。当初は1歳半になる息子一人をつれての母子単身赴任でしたが、今は東京の勤めを辞め転職した夫と生粡の道産子娘を含め、同じ屋根の下に暮らしています。研究職ポストは全国区で、3~5年といった任期も多いため、家族が離れて暮らすケースは少なくないのですが、幸運に恵まれています。私が所属する森林科学科は、学内でも特に自由でおおらか、かつての洛北高校の校風に通じるものがあり居心地がよいのもまた幸運です。

2000年に博士号を取得後、日本中の森・里・湿地で興味の赴くまま研究してきましたが、通底するテーマは「かく乱と再生」だと最近気づき

ました。「國破れて山河在り」という杜甫の一節とは異なり、目の前にある自然是絶えず変化しています。

洪水・動物による食害といった自然のかく乱、伐採・火入れなど人によるかく乱です。いつたん失われた自然是、時間をかけねば元に戻るとは限りません。そのまま再生しないこともあるし、異なる自然に変化することもあります。それは、人口

の増減や生活様式の変容、地球温暖化による気候変動が、かく乱の周期や強度に絶えず影響を与えていて、生き物が環境変化に適応する力も多様な条件で変化することなどが理由でしょう。

現象は複雑ですが、人間の一生よりはるかに長い時間スケールで動いている自然の変化をとらえ、多様な条件下で将来像がどのように変化するのか予測する研究は、とても魅力的です。

最近は大学生だけでなく、小中高の生徒の前に立つ機会も増えてきました。幼少期に吉田山を駆け回った経験、糺の森がみせる四季折々の美しい姿、洛北高校の恩師、滋野哲秀先生や澤木正彦先生から学んだ自然科学の魅力が、今の仕事に繋がっていることに思いを馳せます。地球上の子供達が大志を抱いて歩んでいく環境づくりに、多様な角度から貢献していきたいです。



北大農学部森林科学科の実習風景